2018 年度 大学生の力を活用した集落復興支援事業

福島県二本松市東和地区西谷集落
事業報告書

※2018 年 9 月 15 日 西谷公会堂前にて

2019 年 2 月

国士舘大学文学部史学地理学科　地理・環境コース

宮地ゼミナール

目　次

１．はじめに　・・・・・・　3
２．2018 年度「国士舘大学西谷学校」の活動内容　・・・・・・　3
　１）　5 月の活動―ご祈祷祭、田植え―　・・・・・・　3
　２）　7 月の活動―草取り、草刈り、東和ロードレース大会への参加―　・・・・・・　5
　３）　8 月の活動―草取り、草刈り、夏祭りへの参加―　・・・・・・　7
　４）　9 月の活動―稲刈り、西谷地域づくりワークショップの開催―　・・・・・・　9
　５）11 月の活動―学園祭等での「福島の味」、LOHAS 米の販売―　・・・・・・　12
３．活動方針に対する検証―「実証実験」に関わる考察―　・・・・・・　15
４．交流のなかで生まれてきた地域の新しい動きと今後の展望
　―まとめにかえて―　・・・・・・　16

謝辞　・・・・・・　17
参考文献　・・・・・・　18

１．はじめに

国士舘大学文学部史学地理学科地理・環境コースの宮地ゼミナールは、二本松市西谷集落との交流を 2009 年度から継続してきた。これまでにおける活動の歴史の一端は、宮地（2013）や昨年度の本事業の報告書において示したが、私たちは今年度も福島県の「大学生の力を活用した集落復興支援事業」の採択を受けて、西谷集落との交流活動を継続することができた。福島県の事業という点でみれば、今年度は事業２年目ということになる。それゆえ、今年度の私たちの活動は、これまで続けてきた農業体験および交流事業だけではなく、昨年度の提案について「実証実験」を実施することが求められていた。

昨年度の報告書において､今年度の活動指針として 3 点を指摘した｡第 1 は、世代を越えた地域づくりの方向性に関わる検討会の開催、②地域資源としての農産物およびその加工品の販売力強化、③交流人口の拡充、であった。本報告書では、今年度の活動内容を報告するとともに、上記 3 点に関わる成果と課題について明らかにすることを目的とする。

２．2018 年度「国士舘大学西谷学校」の活動内容

１）5 月の活動―ご祈祷祭への参加、田植え―

今年度の「国士舘大学西谷学校」も、5 月 3 日の住吉神社のご祈祷祭から始まった。学生の参加者は 9 名であった。今年も学生代表に玉串奉奠をさせていただき、学生みなで作業の無事と実りの秋を迎えられるようにお祈りした（写真 1)。ご祈祷祭終了後は、お神酒とともに集落の皆さんの持ち寄ったお重をいただいた（写真 2)。

写真 1．住吉神社ご祈祷祭に参加

写真 2．集落の皆さんと交流

翌 5 月 4 日に、田植えを行った（写真 3)。当日の午前中は、あいにくの雨天であったが、集落の皆さんのご支援をいただいて終日をかけて 11a の水田に苗

を植えていった（写真 3)。今年は、集落に居住する小学生が私たちと一緒に田植えに取り組んだ（写真 4)。この活動の一つの課題であった若手世代との交流にもつながる可能性のあることで、貴重な参加だった。

写真 3．田植え作業がスタート

写真 4．小学生も田植えに参加

写真 5．昨年より手際のよい作業

写真 6．作業を終えて集合写真

夕方からは、恒例の「大交流会」が行われた（写真 7)。バーベキューを楽しみながら、交流を深めた。私たち学生もここで自己紹介が求められた。今回参加しているメンバーはすべて 4 年生であり、昨年度も何度か西谷集落での活動

写真 7．恒例の大交流会

写真 8．皆さん一言挨拶しました

に参加している者が多かったため、集落の皆さんとの交流もスムーズだったように思われる。集落の皆さんからも自己紹介があった（写真 8)。

最終日となった 5 月 5 日は、男子学生がお世話になった西谷公会堂をみんなで清掃してから帰路についた。西谷集落では、2016 年度に住民の健康増進を目的に公会堂の一角に風呂が設置された。その後、私たち国士舘大学の学生が農業実習に来た折には、男子学生の宿泊施設として公会堂を利用させていただいてきた。これまでの感謝の気持ちを込めて、丁寧に清掃をした。

２）6・7 月の活動―草取り、草刈り、東和ロードレースへの参加―

6・7 月は、草取りと草刈りを目的に西谷集落で活動している。あわせて 7 月 1 週目の日曜日に開催された東和ロードレース大会の補助と参加も目的としている。今年度の参加者は 10 名であった。

6 月 30 日の午前中は、ロードレース大会の会場設営をお手伝いした。49 回目を迎えた東和ロードレース大会の開催に際して、地元のいなほ陸友会の皆さんと一緒に会場設営や前夜祭の準備をお手伝いした（写真 9・10)。

写真 9．会場設営に集まったいなほ陸友会の皆さんと学生たち

写真 10．調理を手伝うＳ君

30 日の午後は、実習圃場で草取りを行うとともに（写真 11)、貝作の棚田地帯の自己保全管理水田の草刈りをお手伝いした（写真 12)。今年度もこの段階では雑草の量が少なく、作業は比較的楽であった。

写真 11．草取り作業

写真 12．草刈り作業を終えて

翌 7 月 1 日は、給水担当の学生が早朝から給水所の設営のお手伝いを行った（写真 13・14）。昨年度の報告書でも述べているように、この大会が東和地区の住民によって支えられていることを実感する作業だった。その一方で、今年も 4 名の男子学生が 10km の部に、2 名の女子学生がウォークの部にそれぞれ出場した（写真 15）。宮地ゼミでは、2013 年から当時陸上競技部（長距離ブロック）に在籍していた学生がハーフの部へ出走したことをきっかけに、「学生たちもレースに出よう」という機運が高まり、今年度までそれが続いてきた。それぞれの目標のなかで、大会へ参加することを楽しんできた。今年度も無事に、大会を終えることができた。

写真 13．早朝からの給水所設営作業

写真 14．準備が進む 2.5km 給水地点

写真 15. 完走証と記念品をもって記念撮影

３）８月の活動―草取り、草刈り、夏祭りへの参加―

８月は、実習圃場の草取り（写真 16)、中山間地域等直接支払制度の交付対象水田の管理作業（農道を含めた草刈り：写真 17)、そして夏祭りへの参加を目的に訪問した。今年度の参加者は５名であった。この時期、私たちの実習水田では、ヒエなどの雑草がかなり生えていた。だいぶ成長した稲の株間を歩きながら、ヒエを抜く作業を半日かけて行った。しかし、すべてを取り除くことはできず、稲刈りへむけて不安な気持ちになった。

写真 16. ヒエを取り除く作業

写真 17. 農道の除草作業

今年も集落の子ども会が主催となった夏祭りが行われた。今年度も、われわれが訪問した８月 18 日の夕方から、恒例の流しそうめん、スイカ割り、花火大会が行われた（写真 18・19)。昨年度からグレードアップした花火大会は、今年も集落の皆さん等の寄付によって盛大に行われた（写真 20・21)。集落に

おいて、新しい地域づくりが進められていることを実感した。

写真 18．流しそうめんを楽しむ

写真 19．若いお父さん・お母さんも一緒にスイカ割

写真 20．西谷集落を照らす花火

写真 21．花火に見入る集落の皆さん

４）9 月の活動―稲刈り、西谷地域づくりワークショップの開催―

今年度は、稲の生育が早かったため、稲刈りを 9 月 15 日に行った（9 月 14 日に東京を出発して西谷入りした)。後述するように、ゼミの担当教員である宮地先生が今年度より日本大学経済学部へ異動したため、10 年間続いてきた「国士舘大学西谷学校」は今年度で終わることになった。これまでこの活動に参加してきたゼミの卒業生にも広く声をかけて、今年度の稲刈りが行われた。参加者は、学生 13 名、卒業生 7 名であった。

今年も集落の皆さんから稲の持ち方、鎌の使い方、刈り取った稲の取り扱い方、稲の束ね方などを教えてもらいながら作業をした（写真 22、23)。また、稲を刈り取る作業と同時に束ねる作業も行う必要がある中で、学生たち同士で役割分担をしながら作業を進めていった。当日は、午前中を中心に雨天のなかでの作業であったが、新聞社 2 社、テレビ局 1 社からの取材を受けながらの作業となった（写真 24)。昨年度は天候不順のため、脱穀、精米作業が大幅に遅

写真 22．稲刈りの方法の説明を受ける

写真 23．稲刈り作業

写真 24．新聞社からの取材を受けながら作業

写真 25．はさかけ作業

れてしまったが、今年も天日干し乾燥にこだわるためにはさがけ作業も行った（写真 25)。こうして「国士舘大学西谷学校」最後の稲刈りは終わった（写真 27)。

写真 26. 作業後に集落の皆さんと記念撮影

稲刈りの翌日、9 月 16 日には西谷地域づくりワークショップを開催した。このワークショップでは、①西谷の魅力、②西谷が抱える課題、③西谷のこれから（将来展望）の 3 点について話し合った。4 つの班に分かれ、それぞれの班に学生と卒業生、集落の方が混ざって議論を進めた。その後、班ごとに発表した。①と③については学生が、②については集落住民がそれぞれ発表した。その結果は、以下のようにまとめられる。

①西谷の魅力

1）自然の豊かさ

・馬洗井川渓流の景観

・里山の景観が素晴らしい

・空気がきれい

・静か

・時間がゆっくり流れている感じがする

2）住民の皆さん

・温かい人柄

・笑顔が素敵

写真 27. ワークショップで議論する参加者

・西谷の人たちの絆の深さ
・いろいろなことが円滑に実施できる
・学生たちにも積極的に話しかけてくれる
・地域のコミュニティがしっかりしている
・団結力がある

3）農産物など
・お米や野菜のおいしさ
・特産品がいろいろある
・大七（お酒）

4）その他
・住吉神社 1000 年の歴史
・みんなで集まれる場所がある
→公会堂、宍戸商店
・西谷ではないが、東和ロードレースは地域の誇り。

写真 28. 西谷の魅力を語る学生

②西谷が抱える課題

1）住民の少子・高齢化
→農業だけでなく地域の担い手問題が深刻

2）山間部での耕作放棄地の拡大
→獣害被害が深刻になっている

3）交通の不便さ
→買い物や通院などに影響している

4）観光資源が有効活用されていない

写真 29. 西谷の課題を語る住民

③西谷のこれから

1）農業を継続する環境づくり
・小規模な圃場整備が必要
・販路の確保（適正価格で販売できる販路の確保）
・農作業の共同化　集落営農も視野に入れる

2）特産品づくり
・お米
・ツルムラサキ

３）観光

・住吉神社の観光資源としての利用

４）交通

・介護タクシーの導入

５）移住者、交流人口の受け入れ

・空き家情報、軽トラプレゼントなど

・ボランティア、棚田オーナーなど交流人口の受け入れ

６）情報発信

・SNS の活用

写真 30．今後の展望を語る学生

最後に、住民の代表として佐藤佐市氏から、ワークショップの講評をいただいた。そこでは次の点が指摘された。

第 1 は、こうした地域の課題や問題、これからのあり方を真剣に議論できて良かったという点である。10 年間、国士舘大学の学生と交流を続けてきたが、なかなか真剣にこうした点について話し合う機会が設けられなかった（毎年、取り組みの反省会等を行っているが、地域の課題を総合的に議論できていなかった）。

第 2 は、学生たちによって地域の魅力を改めて認識できたという点である。西谷集落で暮らす住民の皆さんは、自然や景観、住民同士の関わりは当たり前にあるものであり､それらが魅力であると学生たちによって評価されることで、地域に対する誇りを感じるということであった。

第 3 は、今後の展開については必ずしも明確な方向性をきちんと議論できなかったが、やはり西谷集落の住民同士が水田農業を柱に結びついていることは事実であり、そのためにも稲作のあり方を検討する必要があるということであった。この点は、昨年度の報告書で指摘されている点とも関係している。

５）11 月の活動―学園祭等での「福島の味」、LOHAS 米の販売―

今年度も国士舘大学の学園祭「楓門祭」に出店した。今年度の学園祭への出店は、昨年度実施した「西谷めしフェス」と、それを踏まえた今年度の活動指針となっていた地元の農産物および加工品の販売力強化を目的としていた。

メニューは、①焼きおにぎりセット（いかにんじん付き）、②「LOHAS 米」（精米：袋売り）、③煮しめ、とした（写真 31～35 参照）。①の焼きおにぎりと②については、これまでの学園祭において販売してきたものでもあり、そのノウ・ハウが先輩から受け継がれていたが、①のいかにんじんと③は今年度初め

て販売することになったため、9 月の稲刈りの頃から西谷のお母さんたちや東和地区の地域おこし協力隊の樋口陽子氏に助言をいただきながら、準備を進めた。とくに樋口氏には、調理指導等でお世話になった。また、今回は西谷の皆さん 12 名にもご来校いただき（写真 36)、調理と販売を支援していただいた。なお、2018 年の米の収穫量は約 450kg（玄米ベース）であった。前年より約 30kg 多かった。

写真 31．いかにんじんの調理（１）

写真 32．いかにんじんの調理（２）

写真 33（左）．郷土料理の宣伝

野菜は、卒業生が勤務する野菜の卸売会社から購入した。地場産の野菜を活用することは、季節性、需要量の多寡の面から難しいことも多い。

写真 34．販売担当の学生（１）　　写真 35．販売担当の学生（２）

写真 36．西谷の皆さんと一緒に

学園祭では、焼きおにぎり 786 個、「LOHAS 米」110kg、煮しめ 423 杯を売ることができた。しかし、いかにんじんは、当初焼きにおにぎりセットとして 1,000 皿の販売を目指したが(1 皿 15g)、予定通り販売することは難しかった。販売数量は 500 皿を下回った。この理由は、1 日目の天候が悪かったことも関係している可能性があるが、それ以上に販売の場が学園祭ということで、主たる客層が 10 歳代後半から 20 歳代にかけての若い世代が中心であったため、漬物が苦手だとする来訪者が多かったことと関連しているように思われる。また、東京において福島の郷土料理について認識が薄く、関心を寄せてもらうことが

難しかった。販売先、販売方法の工夫が必要であった。

学園祭終了後、昨年度と同様に Facebook を活用して米の注文を受けた。今年度も SNS を活用した米の販売は順調で、結果的にうるち米 300kg、もち米 30kg を売ることができた。 昨年度と比較して、国士舘大学の教職員からの注文が多く遠隔地への販売量は減少した。この背景には、宮地ゼミの米の販売が今年度最後となることとも関係していると思われる。また、大学近くの飲食店での米の販売も実現できた。定期的な米の購入も約束いただいており、この点は西谷米の販路拡大にもつながることになりそうだ。

３．活動方針に対する検証―「実証実験」に関わる考察―

ここでは、今年度の活動方針であった、①世代を越えた地域づくりの方向性に関わる検討会の開催、②地域資源としての農産物およびその加工品の販売力強化、③交流人口の拡充、について実態に即して検証したい。

①については、9 月の地域づくりワークショップで実現したいと考えていた。当日は、7 名の西谷集落の方々に参加いただき、活発な意見交換をすることができた。しかし、参加者はすべて 60 歳代以上の方々であった。もちろんこれらの世代の方々との議論は有益であり、これまで関わりをもってきた西谷集落の魅力や課題について見識を深めることができたわけだが、昨年度の報告書でも指摘されている後継者世代との意見交換という点では、十分な成果を生んだとは言えなかった。こうした事態は、①後継者世代へのワークショップ開催の情報伝達が不十分であったこと、②「国士舘大学西谷学校」が中山間地域直接支払制度の活動の一環として位置づけられているために、農業生産に関わりの薄い世代に対して関心を寄せてもらうことが難しかった、などの理由が考えられる。一方で、後継者世代が多数集まる 8 月の夏祭りの機会をうまく活用する必要があった。一堂会しての話し合いは難しい雰囲気であるが、ワークショップで議論したような諸点についてアンケートを実施するなど、後継者世代の西谷集落に対する考えを把握する必要はあったように思われる。

②については、従来から大学の学園祭での販売とあわせて、歴代のゼミ生が取り組んできた大学周辺の飲食店での米販売、さらには SNS を通した販路拡大が一定の成果を生んできた。今年度も 450kg の米を完売することができた。注文期間をさらに広げれば、まだまだ販売することはできそうである。このことは、10 年間にわたって取り組みを続けてきたことで、大学関係者のみならず飲食店、さらには学生の親戚や友人などへ、この取り組みの意義や理解を得ることにつながってきたこととも関連しているように思われる。注文を受ける受

け手の窓口の明確化やその受け継ぎ体制を構築するとともに、集落側の米の供給の仕組みを構築できれば、今後さらに新しい展開を見出せる可能性があるように思われる。9 月のワークショップの折、「水田農業の継続が集落のコミュニティを維持することにもつながるため、水田農業の再構築が大きな課題である」と指摘していた佐藤氏の講評コメントに対応するためにも、米の販売体制の再構築を今後さらに検討する必要がある。

③については、今年度の活動の中で、「国士舘大学西谷学校」の取り組みに関心をもつ卒業生や昨年の米の購入者、集落の小学生に、西谷学校の活動に参加していただくことができた。とくに米の購入者に活動へ参画いただけたことは、今後の活動を考えるにあたって積極的な評価をしたい。今年度も学園祭終了後に、約 30 名へ米の販売を行うことができた。これらの購入者を中心に、西谷集落での活動（作業）を情宣しながら、中山間地域農業の現状理解や米の適正価格に対する理解を深めてもらうための活動を進めていくことも一考ではないだろうか。こうした点の検討は、残念ながらゼミ中で十分に詰めることができず、今後の検討課題として残されている。

４．交流のなかで生まれてきた地域の新しい動きと今後の展望
―まとめにかえて―

国士舘大学宮地ゼミナールは、二本松市太田の西谷集落と 10 年にわたって交流を続けてきた。西谷集落では、交流が始まったころからこの取り組みを「国士舘大学西谷学校」と称して、愛着をもって向き合っていただいてきた。この間の活動の歴史は、国士舘大学文学部史学地理学科地理・環境コース宮地ゼミナール（2018）や宮地（2019）で明らかにされている。とくに宮地（2019）では、学生と西谷集落住民の両者による交流事業に対する評価を分析している。ここでは、この取り組みに関わった約 8 割の学生や集落住民が、交流活動に対して一定の評価を下している実態が明らかになった。

福島県の事業採択を受けている 2 年間のなかで、西谷集落では次のような新しい地域づくりの動きが生まれてきた。

1 つめは、多様な世代にわたって楽しむことのできるイベントが実施されるようになったことである。8 月の子ども会主催の夏祭りは、少なくとも国士舘大学との交流活動が始まった 2009 年度以降、続けて実施されているが、この 2 年間で大規模な花火大会を開催するようになった。そこでは、住民が寄付を募り、老若男女が集まって楽しむことのできるイベントを創りあげようとしてきた。2018 年度は、このイベントに集落内外の約 80 名が集まり花火を楽しみ

ながら、新しい会話や交流が生まれていた。ここでは、農業実習を柱とした「国士舘大学西谷学校」に関わっていない世帯も含めて、住民の新しい交流が始まっている。

2 つめは、30 歳代から 40 歳代の世代の中で、農業や農村の景観に対して再評価し、関心を寄せてこなかった農業に対して関心をもち始めた住民が出てきている点である。こうした若手世代は、すでに農業以外の就業先に勤務しており、専業的に農業を行うことに無理はあるものの、兼業農家として水田農業を継承していく可能性はある。そのためにも、農産物販売の方法が重要なポイントになるだろう。

3つめは、2016年度に住民の健康増進を目的に完成した西谷公会堂の風呂が、交流活動を支えている点である。風呂の完成によって、公会堂が「国士舘大学西谷学校」の宿泊施設としても活用されるようになった。そのことによって、住民の学生たちの民泊受け入れ負担が軽減されるとともに、利用料を交流活動の資金の一部に充てることもできるようになった。

しかし、残念ながら「国士舘大学西谷学校」は 2018 年度で終了となる。国士舘大学のゼミ担当教員であった宮地先生が日本大学経済学部へ異動したためである。宮地ゼミが 2018 年度でなくなるため、ゼミとして西谷集落と交流することはできなくなる。今後の西谷集落と大学生との交流を通した地域づくりの実践は、日本大学経済学部で開講される宮地ゼミの活動内容に大きく左右されることになる。この活動に関わった学生としては、この活動が新たな形で継続することを望みたい。一方で、西谷集落との交流活動に大きなやりがいをもって取り組んだ国士舘大学の宮地ゼミ卒業生も少なくない。昨年度や今年度の事業報告会において報告があったように、大学生時代に関わった集落（住民）と卒業後も関わりをもっている大学もある。私たちは、そうした事例を参考にしながら、卒業生による交流活動の継続方法についても検討していく必要がある。

〔謝辞〕

日ごろから大変お世話になっております西谷集落の皆様に厚く御礼申し上げます。とくに今年度は、佐藤区長をはじめとする皆様に、福島県の事業申請にあたり、申請書の作成等の労をいただきました。10 年にわたる交流をいただきましたことについても、この場を借りて御礼申し上げます。また、今年度は二本松市地域おこし協力隊の樋口陽子様にも大変お世話になりました。記して厚く御礼申し上げます。

参考文献

・国士舘大学文学部史学地理学科地理・環境コース　宮地ゼミナール　2018.『2017 年度 大学生の力を活用した集落復興支援事業　福島県二本松市東和地区西谷集落実態調査報告書』27p.

・宮地忠幸　2013. 大学生による体験を通した農業・農村学習－2009・2010 年の活動記録と事後評価－. 国士舘大学地理学報告 21：79-92.

・宮地忠幸　2019. 大学生と農村住民との農業体験を通した交流活動の意義と課題―「国士舘大学西谷学校」を事例として―. 経済地理学年報 65-1（掲載決定）.

活動の拠点施設・西谷公会堂
西谷集落では、国士舘大学との交流時に、
自作の「国士舘大学西谷学校」の看板と大学の旗が掲げられる。

2018 年度 大学生の力を活用した集落復興支援事業
国士舘大学文学部史学地理学科地理・環境コース
宮地ゼミナール
福島県二本松市東和地区西谷集落事業報告書（非売品）

発行年月日：2019 年 2 月 28 日

編集・発行責任者：国士舘大学文学部史学地理学科地理・環境コース
宮地ゼミナール
日本大学経済学部　　宮地忠幸
〒101-8360　東京都千代田区神田三崎町 1-3-2
電話・ファックス　　03-3219-3792
e-mail　　miyachi.tadayuki@nihon-u.ac.jp